



精神身体医学の理論と実際（各論 1）

池見酉次郎 編集

リハビリテーションとはほとんど時を同じくして発展してきた「精神身体医学」の領域において、先駆的な仕事をされて来られた小児科・産婦人科・眼科・皮膚科・歯科口腔外科・内科の各々のパイオニアによって分担執筆された、日本におけるこの領域の恰好な啓蒙書である。

中でも、我々身体障害を対象に仕事をしているものにとって、特に参考になるのは内科の章における「災害神経症」の項であろう。この項は一応「災害神経症」というタイトルで始まっているが、いわゆる心因性運動障害について広く解説されており、その発症機転、診断の方法、治療等に関して、多数の症例をあげながら臨床的・実地的に書かれている。特に「診断の実際」では(a)

運動麻痺として、筋トーン・深部反射・筋萎縮度・肢位変形・知覚障害(b)不随意運動(c)失調(d)構音、言語障害、等について器質障害との鑑別の実際が的確に整理されており、ややもすると身体主義におちいりやすい我々への大きな警鐘となっている。

身体障害を取扱っていて、何時遭遇するかも知れないこの種の心因性運動障害について、ある程度の理解をしておくことは大いに有用であろうし、この本はその目的のため是非一読をすすめた良書である。

(医学書院, 323 頁, 3,000 円, 1968 年)

(府中リハビリテーション学院 金子 翼)

人類（ホモサピエンスへの道）

江原 昭善 著

我々人間、特に医療に携わる私達は、人と接する度に、果して人間や人類とは何であろうかと考えさせられることは度々である。その度に結論が出ずいつの間にか次の問題にあたる。以前、人類汎論という本の中で「始まりの問題は終りの問題である」という一節を読んだことがあるが、本著者（現京都大学霊長類研究所助教授）が 12 年程前に「人間を深る」という本書と同じような小冊子を著わしているが同書でも人類学の立場から我々が描いている種々の人間像を多角度から一つの方向へ理解しやすく導いている。本書ではさらにその後の研究を加えて解説している。以下目次を追ってその一部分を紹介する。第一章では自然界での人類のあり方と題して、自然、生物の進化、自然界での人間の出現と存在が意味するもの、そして人間が文化を創りその文化がヒトの体質をかえ進化させヒトを作り出すメカニズムを、第二章では「人類」「人」「ヒト」「人間」という言葉の意味、人間をホモサピエンスと名づけた理由、生物としての人間の歴史。第三章ではヒトやサルと土台になったものとその心的活動、神経系の中枢化、脳の進化の説明、第四、五、六章ではサルを中心にサルとはどんな動物か、また霊長類の進化、新脳化現象、霊長類の運動様式の種類、直立二足歩行への進化、サルと人間の運動様式の違

い、第七章では骨格、筋肉、歯等の形態的な進化を。第八章では人類の系統を化石を道しるべに追跡している。最後の章では「苦悩する人類」と題し、人類の将来を類推している。その一部を引用すると「まもなく人類は進化の第四段階への臨界点に達するだろう。人類社会は文明化、機械化、技術化、産業化の傾向をおそれるべき加速を加えながら一貫してその性質を強めている。その結果、非自然の技術社会や人工環境への適応がいよいよ強制され自然淘汰ならぬ社会淘汰がはげしくなり、それだけで社会からはみ出した不適合者も多くなる。近代社会におけるノイローゼ患者や社会犯罪者の増加が、この気配をそれとなく暗示している。」…云々。さらに自然保護、環境破壊や公害について述べ、歴史には可逆性はゆるさず「自然に帰れ」とか個人的に文明の塵埃をさけタヒチ島におもむいてもなら現実の解決にならない事を説き、物質文明、技術万能、科学至上主義の桎梏から、ふたたび人間性を回復すべく第二のルネッサンスを全人類、人種をこえ、民族をこえて解決することが 20 世紀最大の課題であると結んでいる。

(日本放送出版協会, 227 ページ 600 円)

(高知リハビリテーション学院 中屋久長)